

大阪大学リーダーシップ教育研究会 第20回会合

日時：2012年3月29日（木）13時30分～15時30分

場所：大阪大学豊中キャンパス 国際公共政策研究科棟 6階 プロジェクト研究室

参加者：

木川田一榮（大阪大学大学教育実践センターキャリア教育支援部門教授）、多胡圭一（大阪大学名誉教授／大阪大学大学院国際公共政策研究科特任教授）、根岸和政（大阪大学光科学センター特任研究員）、野村美明（大阪大学大学院国際公共政策研究科・高等司法研究科教授）、和住麻矢（株式会社ポラリス・セクレタリーズ・オフィス 代表取締役）、緒方正嗣（佐賀大学キャリアセンター教授）、樋口正樹（静岡家裁富士支部判事）、森下哲郎（上智大学法科大学院教授）、大和谷厚（大阪大学・・・教授）

（順不同・敬称略）

内容：

1. 自己紹介
2. コミュニケーションワークショップ（NPO法人GLEA主催）のご報告
蓮行先生（大阪大学コミュニケーションデザインセンター特任講師）
3. 質疑応答・議論
4. 今後の計画等

議事録

2. コミュニケーションワークショップ（NPO法人GLEA主催）のご報告
蓮行先生（大阪大学コミュニケーションデザインセンター特任講師）

蓮行： 演劇ワークショップの内容や様子をここでお話しても、伝わるものは少ないのではないかと考える。一番気をつけていることだが、演劇ワークショップでは誤ったイメージや強いメッセージを伝えてしまう可能性があり、それを確認する術がないため、発表というよりかは、手掛かりとしてこういうことをしているということを紹介し、様々なことに取り組みされているご参加の先生方からの質疑応答の形で進めたい。

質問ですが、演劇を使ったワークショップのようなものを、実際に体験・見学又は受けた方はいらっしゃるか。どんなものだったか。

根岸： 精神科の障害療法の中で、サイコドラマとか、プレーバックシアターという形で、

外傷体験をもう一度そこで役者・ディレクターを決めて場面を作るという意味での、演劇としてのプログラムを2年ぐらいコ・ワーカーとしてやっていた。

蓮行： それは患者自身も参加するのか。

根岸： サイコドラマの場合は、患者自身が役に入ってやるが、プレーバックシアターでは、患者は客観的に見るスタンス。他の患者や医療スタッフが演劇をし、それを客観的に見て治療をしていくというもの。実際にあった外傷体験の場面をやった後に、本来はどう動くべきだったのかという理想的な演劇シーンに変える。「お前は馬鹿野郎」と言われていたのを、「君には本当に頑張ってほしかった」という言葉に変えるなど、リフレーミングをし、再体験をすることによってトラウマを改善をしていく。

蓮行： それはどういう枠組みで行われていたのか。

根岸： 東京の麻布十番の斎藤クリニックというところで、いろいろなデイケアのプログラムをやっており、その中の一つにプレーバックシアターなどがあった。

蓮行： 大変興味深い話。自分は、糖尿病の専門の先生と一緒に仕事をしており、糖尿病劇場という名前もつけている。糖尿病の専門の先生が、アメリカの防犯ドラマ教育を見て専門である糖尿病に応用できると考えて、京都医療センターにおられる先生が中心となり、糖尿病のドクター、コメディカルといった医療スタッフの教育・研究プログラムとして演劇的な手法を取り入れている。その先生がたまたま駅のキオスクで平田オリザ先生と自分が書いた本を読んで、事務所に電話があり付き合いが始まった。今は、提供側の研修プログラムだが、いずれは患者本人やその家族を含めた演劇プログラムにしたいと。糖尿病は医者が、単純に言うとは治せない病気であり、本人と家族が食事や生活をどうするかということをしなくてはいけないし、予備軍を減らすために食育などを含めたトータルなプログラムを組まないと、社会としては糖尿病とは戦えないということらしく、現在は医療とも関わりがある。

このような調子で、発言された方に対して、それに関わることをお話ししようと思う。次は、木川田先生お願いします。

木川田： 一番最初に演劇ワークショップに出会ったのは、コロラドのアスペン。そこでアスペン・インスティテュートという、昔でいう人文研究所みたいなところがある。そこがエグゼクティブ・リーダーシップ・プログラムを80年ぐらいやっており、

2回聴講として行った。1週間のコースであり、そこに集まるのは、背景が全く違う人18人で、事前に哲学本の抜粋600ページほどを読む。ここでは、その内容の解釈ではなく、「古典に学ぶ」ということで、古典の中から現在われわれが直面する課題にどう役立てられるかという議論をする。午前中8時～12時までみっちりやり、午後は、自由に皆で遊ぶ。アスペンのミュージックフェスでクラシックを聞きに行ったりバレエを見たり、コロラド川で激流下りなんかをする。ハイライトは一番最後にある演劇ワークショップ。ギリシャ演劇、アンチゴーンを題材に皆で演じる。演じることにより、なぜクレオン大王が意思決定に失敗したのか、なぜ姪っ子のアンチゴーンや女王が死ななければならなかったのかということ、建前と自分の王様としての役割と家族としての愛情といった葛藤を踏まえて演ずる。そうすると、演じ方や解釈の仕方が様々あり、自分が演じて感情移入することにより、何がリーダーとして重要であるかということ学ぶ。最初は皆嫌がるが、やらせてみるとすごい。そこから得たものはすごく大きいと思う。演劇は普段やったことないが、やってみるとすごいインパクトがあるツールとして関心がある。

蓮行： ご自身が体験されたのか。

木川田： 私はオブザーバーだったので、見学をしていたが、本当はやりたいと思うぐらいに雰囲気が出ており、大変貴重な経験だった。市民社会におけるリーダーシップのプログラムをやるときに、ぜひ演劇をと思っている。

大和谷： 市民社会におけるリーダーシップで毎年来て頂いているのと、保健学科の新入生に向けたもので、平田オリザ氏のワークショップを見学したことがある。このようなワークショップをしていただくとだいぶ違う。患者接遇というが、演劇ワークショップでやる方がよっぽど身に着くと思う。平田オリザ氏のワークショップしか知らないが、大変感銘を受けている。

蓮行： 木川田先生のお話で、演劇ワークショップよりは、川下りなど遊びに行ったりすることに注目している。実は、取り組みとして、JSTの「犯罪からの子供の安全」という領域で受託研究をしており、そこで研究統括の先生から一番言われて驚いたのは、「そんな楽しいプログラムでは、楽しくて子供たちは忘れてしまうのでは」ということだった。

演劇では、楽しい体験と演劇を作る大変苦しいプロセスがあり、楽しさと苦しさが入り混じっている。最後にはやってみてできたということで、子供たちは栄えある体験をし、それが印象に残って忘れなくなるというのが我々の理屈。しかし、なかなか実証が難しいため、「楽しくて忘れてしまう」と言われると、これだけコ

ンテキストに違いがあるため説得のしようがないと思っていた。しかし、木川田先生のお話では、80年の歴史があるプログラムではわざわざ遊びに行く。遊びに行くよりかは我々の方がマシでしょう（笑）。交渉術でいう松竹梅において竹に落とすためにもっと過激なものを用意するために、今のようなお話は本当に使える。いろんなところの話をパッチワークして説得を行っている。

野村：（演劇ワークショップの資料を配布）今年は1月28日、去年は2月23日に演劇ワークショップが開催された。去年の方の資料が絵が入っているためわかりやすい。去年は法学部の学生向け、今年は外部も含めて開催。基本的には絵は同じ。去年の記録の1ページ目、2ページ目のように、蓮行先生がコンセプトを少しだけ説明し様々なゲームをやった。グループ作りゲームでは、拍手の回数と同じ人数のグループをつくるといったもの。趣旨等は後でご説明いただきたい。3ページ目はジャーマネゲーム。就活生に一人ずつマネージャーがつき、マネージャーが3分間で対象者を取材し、1分間で自分が決めた業界に対してプレゼンを行うというゲーム。一番下が付箋ゲーム。4ページ目は付箋ゲームの説明。このようないくつかのゲームを組み合わせ、実際に演じながら、ときどき監督がコメントをつけながらやっていく。一番最後に実際に体験した人の感想が書いてある。昨年と今年では、最初の歩くゲーム以外は異なる。今年で注目すべき点として、3/6ページにある告白タイムを設けた後の「泡沫裁判」が、法学をやっている人間としては面白かった。これも後で詳しく説明されたい。最後に蓮行先生がコメントされていたが、「泡沫裁判の発展形として、立法過程も劇化できないか」ということを語られていたので、ぜひ一緒に実現しようとしていたところである。

蓮行： 野村先生とのお仕事は、1年目は有志で集まってくれた学生、2年目は社会人も含めて行われた。演劇ワークショップはよく異文化理解、異なる価値観の理解と言われるが、残念なことに、講演や演劇指導に行くと、同じ専門分野やグループといった単一化された集団が集まる傾向がある。老若男女が集まってというようなことがなかなか起こり得なくて悩ましい。日本の持つ感覚や文化を含めた問題かと思う。

今は、プロの小劇場演劇をやっている劇団は日本に2つしかなく、ひとつは我々劇団衛星、もうひとつはヨーロッパ企画という劇団であり、2つとも京都にある。最近は大学や行政がプロを作るような動きがある。我々が異物として、単一化されたコミュニティに入っていくという形でやっている。特に2年目は学生さん、いろんな年齢の方も来られた。もっといろんな人が参加する形でやりたいと思っている。やはり、少しプログラムの内容を説明しないと手掛かりにならないと思うので、説明をさせていただきたい。

配布資料の説明（運行）

グループを作ったり、自己紹介をしたりすることについて、いちいち直接的に指示をしない。例えば歩きまわるゲームでは、「2500年前にギリシアで直接民主制が生まれた時に、市民演劇が同時に開催されたと言われていました。このときから脈々と演劇の世界ではシアターゲームというものが作られてきました。2500年の伝統を持つ秘奥義歩くアンドとまーるゲームを始めます」という風にやる。そして歩きまわらせ、手をたたくとグループになり、握手し自己紹介をして座るということをやると、何話そうかといったことを考える前に、握手し自己紹介させられるため、結果的にグループができてしまっている。何回か繰り返すと15人ないし20人の中で自己紹介した人が過半数を超える。ゲームのルールにバイパスを作って、コミュニケーションのハードルを結果的に越えているようにする。この手法をバイパス効果と呼んでいる。相手が考えて行動を決定する前に、状況に慣らしてしまう。周りがやっているためにやらざるを得ない状況を作り、コミュニケーションの渦に巻き込むという手法をとっている。

演劇自体がそのような性質をもっている。つまり、人を演じることによって、何でも直接考えて行動するよりも、もう少し雑な、合意のような合意でないようなものでも大事なのだということを、感覚的・暗黙的に短時間で体験してもらうには、演劇が非常に向いている。このような体験を与えるものをモジュール化・細分化しており、発声練習するだけでも、いろんな気づきがある。こういったバイパスで得られる副次的なものを重視してプログラムを組んでいる。

1分ジャーマネも劇的な手法である。

大学生相手では、始める前に、「あなたはギリギリの世代で、管理職になって威張りたい時に、多様な教育を受けた下の世代から追いやられる可哀そうな世代。今が最後のチャンスで、がんばらないといけない」と脅す。その後で、自分が何になりたいか、職業についている人は本当は何になりたかったかというのを聞く。最後の1分のプレゼン後に、最終的に採否をも決める。集まった人は1回しか採用できないというシビアなルールでやっている。

3分のヒアリング、1分のプレゼンで別の人生が体験できる。

1人に対して3人のマネージャーがつくような場合では、3分ないし5分でマネージャー同士で合意形成が必要となる。演劇とは、合意形成がないと成り立たない。そのプロセスには色んな交渉が含まれる。例えば、どうしてもこの役、セリフが言いたいなど。最後にはたとえ不採用であったとしても、笑って色んな体験ができる良さがある。

付箋でやるプレゼンでは、いかにして世の中の仕事が成立しており、お金が動いており、それによって社会人が社会的な仕事ができるかということを体験するもの。

このゲームでは、2色の付箋に団体と商材を書く。例えば、一方の付箋には「シーシェパード」、もう一方は「マンガ雑誌」。マンガ雑誌をシーシェパードに売るにはどうしたらいいか、といった主題でプレゼンさせる。実際に採否も決める。社会企業家になりたい人向けには、もっとシビアなものをやらせる。例えば、ランプを配り、エースであれば1000円2であれば2000円・・・とし、これが前職の自給とする。異なる自給の人が10人集まると、フルタイムで雇う場合の1か月の人件費が出てくる。さらに、商材の仕入れ値、テナント賃料などを含めた金額で売れない限りは、売れないと仕方ない。最低トントンで回していかないといかにも素晴らしい理念でも続かないことを伝え、体験してもらう。2日3日やる場合は、事業計画を作ることも必須とする。このようにいろいろな負荷を組み合わせる進めていく。

泡沫裁判所は、参加者全員が人には言えないが笑える罪の告白をする。例えば、小学校3年生の時に友達誕生日パーティーで置いてあったガンダムの模型がどうしてもほしく、持って帰ってしまったなど。このような事件を題材に、裁判官、検察、弁護士役で分かれて、審議をする。ガンダムの例では、最終的に求刑として、ガンダムの曲を熱唱した後、その子の家の前で謝るといったことが検察役から言われ、裁判官役は5分間の合議の後、大きな声で謝ることを判決として言い渡す。こういう形で、全てが法によって定められているわけではなく、解釈で刑事罰ですら課さなければならないということを、一般市民に対してわかってもらう。一般市民は、まったく違った能力を持った裁判官が正義・非正義を決めてくれると本気で思っている。しかし、案外そうではない。ましてや、法を作っているのは立法というプロセスであり、我々が間接的ないし直接的に法を作っているのだということを理解していない。したがって、大人と合意形成したりするとき、「訴えてやるからな」と言うが、それは、「別の能力を持った誰かに白黒つけてもらうからな」という文脈で言っている場合がある。そうでもないのだということを経験で言うのではなく、このようなゲームを通じて体験してもらう。報告のような報告ではないような感じであったが、一旦これで終了としたい。

3. 質疑応答・議論

樋口： 異分野理解の問題について、家裁では様々な人が来るため、理想的な環境にいると思われる。例えば、遺産分割では家族でも一度も会ったことがない人が集まることもあり、これを何とかまとめるのが裁判官の仕事。遺産の範囲、相続人か否か、寄与分の議論、生前贈与の議論など、山ほどの議論がある中、やることは遺産分割。面白いのではないか。

蓮行： 簡裁から京都地裁に控訴した事件で、調停委員に話を聞いて演劇を書いた。大変な仕事だなと思った。

樋口： もう家裁を離れてしまうが、調停委員向けに演劇ワークショップをやっていたらよかったと思った。

蓮行： 調停委員には色々な方々がいらっしゃるからか。

樋口： 調停委員は最高裁から基準を決めており、実は一定の層からしか来ない。そういう方からすると、思いもつかないような生活をされている人が当事者にいるため、その人たちの言い分をどう理解すべきかについては非常に難しい。呼べば良かった。

話を伺っていて思ったのは、自分も芝居がかって仕事をしている。この人はどういうチャンネルに合わせると話ができ、納得してもらうかを常に探る。そのために、どうしてもよいような話をしながら探る。自分は怖い役、調停委員はフォロー役といったように、言い方や、役割を変えて、システムとして対応する。少年審判では、裁判官が怖い一役で、後からフォローさせるという手法もとる。裁判官としての教育にもうまく取り入れられないかなと思って聞いていた。

蓮行： 演劇もその手法をとる。落語家も同じ手法をとる。口座に立ってから枕で話しながら、お客を見ながら演目を決めて話す。直接は交渉しないが、お客の反応を見てやっている。

大和谷： 実は、学生支援をやっていたとき、カルト問題に取り組んだ。一番最初、2006年ごろ統一教会に入ってる学生を発見し、彼らと話をし、救出することをした。カルトでは、学生は良い待遇をされ、あるタスクを与えられ、それを達成すると非常にほめられることにより、マインドコントロールに陥り、教祖が絶対化し、教祖のためならなんでもするといった1つの価値観しか持たない人間になってしまう。そこで、様々な価値観が存在するという多様性を大学で教えたいと思っている。今大変困っているのが、保護説得という手法。統一教会、摂理、浄土真宗親鸞会の3つの団体に関して、気付いた時点で阪大で100人が被害に遭っていた。今はひと桁。彼らを脱会させるために当時行っていたのが、保護説得という手法。宗

教家あるいは弁護士が家族に言い、家族がその学生を捕まえてウィークリーマンションに連れて行き、外から鍵をかけて延々と説得する。それで間違いに気づいて復帰するのだが、家族に対してトラウマが生まれたり、後々のケアが膨大となる。

何を申しあげたいかという、演劇ワークショップがいわゆるマインドコントロールに対して力を持っているのではないかということ。ひとつの価値観でしか物を考えられなくなった学生に対して、価値観の多様性やコミュニケーションの仕方を含めて教育するようなことが理想かなと思っている。学生を見ていると、何らかの小さな問題を持っている学生がカルトに入っていく、相手がその問題を見つけてあたかも解決策があるように示していくことにより、自分で考えなくなるようにしていく。したがって、脱会した後でも、指示がないと動けない。これは今の学生に共通しているのではないだろうか。自分で考えず、安易に回答を求めているような気がする。最初は、カルト問題には、とんでもない団体に対して退治してやるという思いで取り組んだが、そうではなく、今の教育問題そのものだという印象を受けている。彼らの考えを転換するのに、演劇が非常に有効ではないだろうか。

蓮行： 演劇指導とカルトとは手法は同じ。小学校で子供たちに対して、将来の演劇の収入源とならせるために、演劇は素晴らしい、演劇をやると夢は何でもかなう、と言いかるとカルトと同じ。

子供でも4年生5年生では、まとめのときにもう一步踏み込み、「みなさんが今やったことは民主主義という考え方における合意形成と呼ばれています」と言うと、神妙な顔をして聞く。したがって、演劇はあまり強調しないようにしている。

手法は一緒なので、マインドコントロールとは別なるもので解体することは実際可能だと思う。平田さんのワークショップでは、カルト教団でやっているプログラムが一緒だったりする。体重を支えあったり。これは、どっちにアウトプットするという手法の問題となる。

大和谷： 岡山で行われた靈感商法対策弁護士連絡会のシンポジウムで、いままでは保護説得というものでやってきたが、自立支援という考え方で対応したほうがよいのではないかという話をしていた。では実際どのような方法で行うのかはまた難しい。

蓮行： アメリカの例では、少年院の子供たちやベトナム帰還兵に対して演劇を用いて社会復帰を支援している例があり、方法はいくらかもあるかと思う。

我々減劇側できっとこういうことができるだろうということがあるが、そのプログラムを提供できる人材がない。環境、防犯、防災、食育、糖尿病、立法、そ

して今度は司法やろうかと思っており、端緒をつけることはできるのだが、ある一定の専門性を持つどの方に向かって引き継ぐかということが課題として思っている。

もう一つ大きな問題だと思っているのは、戦後日本は、左翼勢力が演劇をプロパガンダに使ったという歴史のせいで、演劇殲滅政策が行われていたということが事実としてあると思われる。小学校に演劇の授業がなく、国立の芸術大学にも演劇のコースがない。これは先進国で日本だけ。実は教育に普通にあるべき演劇の科目や機能が失われたということだと思う。これは、本当は初等教育にやっていたらいけないことが抜け落ちていると思っており、例えばオウムに行ってしまった 100 人のうち何人かは、小学校から演劇をやっておけば自立した感覚を持てたのではないかという仮説を持ってしまう。したがって、今は初等教育にフォーカスを当てている。

樋口： 神奈川県では、演劇をやらせている。保護者会のために様々な演劇をしている。

蓮行： 神奈川県は先進県。神奈川県、兵庫といった大都市の機能を東京とか大阪に任せている自治体は、意思決定が東京や大阪より早く、先進的。とても良い環境。したがって、地域間格差がある。

樋口： 自分から見ると、(子供たちは学校での演劇で) かなりキツことをしている。子供たちは終わると必ず達成感で泣く。

木川田： 日本人だけ演劇やった後の達成感で泣く感じがするのだが、なぜだろうか。

蓮行： やったことがないからと思う。フィンランドメソッドでは、算数の授業でも演劇を用いており、ちょっとした場面で演劇を用いているが、日本はそうではないため、大人になってからそういうことをやると、感動するのではないか。しかしもともと日本人にはそういう感受性はあるのではないか。

根岸： 日本では一体感ということが非常に重要視される。アメリカでは個人主義だが、日本では一緒に何かをすることがすごく価値観を得ていると思う。

先生方のお話を聞いていて、カルトから脱却する方法がわかった。それは、自立できていない学生をどう自立させるかというのがキーワード。ベトナム戦争の帰還兵たちに病棟を一つの社会としてみだてて自治活動をさせたことによって社会復帰を可能にしたという事例があるが、そこで行われていることは、民主的であること、自治活動であること、突き上げが許されること、許容される世界である。それを精神科の集団療法の中で、人格障害の人の社会的自立を図るときに、実際の病院のプログラムを治療者側と患者側が協力してやる。それは温泉旅行でもよいし、クリスマスのイベントでもよい。そこで役割分担を明確にしその役割を果

たすという体験をさせてあげると、患者さんたちは自分もちゃんと社会に参加しているという自信になっていく。そうすると、重度の患者でも2年ぐらいで社会復帰が果たせる。ただ、病院側としては非常にコストのかかる事業であるため、普通の精神科ではなかなかやりたがらないが、それで問題行動も収まってしまう。それを考えると、例えば先生が、民主、自治、突き上げ許容というキーワードに一つの演劇をつくり、そこに参加する学生に民主、自治、突き上げ許容というのを体験させると、それは自立支援になると思う。

蓮行： コスト感覚で言うと病院はそういうことはやりたがらないと思うが、実はトータルでみた社会的コストは相当安く済むのではないかと思った。

根岸： もちろん病院で展開しているデイケアのプログラムは時間制でやっているため、ペイはしている。ただ、1プログラムだけにしてしまうとかなり高コストになってしまうが、全体で考えたらできる。例えば14回1クールといったセッションでやると、かなり効果的だと思う。本当にびっくりするぐらい効果はある。

大和谷： カルト脱会者のリハビリにはすごく有効だと思う。ただ、脱会させるときにどうするかが大変難しい。

根岸： 連れ戻すしかない。オウム真理教にいた子供で養護施設から家出した事例では、捜索願から一斉検問でヒットした。養護施設の職業訓練の先生は、オウム真理教の行動を朝から晩まで見せていた。そうすると、こんなことをしているところなの？とだんだんと変わってくる。したがって、説得するのも重要だが、客観的に見せた方が早いと思う。

蓮行： 方法としては、一旦保護をする手法を取らざるを得ない気がした。私は演出家なため、プロデューサーと相談し、まずは座組みを決める。演劇は社会的な芸術なため、ちゃんとコストが見合い、細かいスケジュールを決めることも、演劇の一部となっている。例えば北海道で講演があり、別の場所で次の講演がある場合に、雪で飛行機が飛ばないコストを想定して、入りを2日前にするなど。したがって、座組みをどうするかが演劇の質を決める。今のお話を聞いていると、どういう座組みをやるかが大事であり、往々に1対1でやってしまうのではないかと思う。これが3者ぐらいになると、とたんに社会的になる。普段からの慣れがあるため、いつも同じ3者でやっているとはだんだん1者になってくる。演劇では積極的に異物を入れて、ランダムにすることを重要視する。精神障害者やカルトに捕まった学生の社会復帰を考えると、キャストにランダム役を入れるといった枠組みで、座組みとして考える。

樋口： 大和谷先生が、先ほど、学生が決められない、自立していないとおっしゃったが、裁判所に来る当事者の相当数はそういう意味で決められない方。だから、裁判所に来ると全て解決してもらえらると思っていらっしゃる。いい面から言うと、「そういう方に紛争解決するのはあなたです。我々は手助けをするしそのためにいくらでも努力するが、最後に決めるのはあなただから、判決を出したところであなただうんと言わなければ決まらないでしょう」という説明をする。一方悪い方も言う、いくら言っても決められないとわかったときは、「こうしなさい」と言う。そうすると、その人の依存性は治らないが、とりあえずその紛争は解決して次に行ける。我々の仕事は、とりあえず次に行ってもらふことだと思っている。今は停滞してうまくいかなっているため、とりあえず終わらせて次に行ってもらふことが仕事と思っており、その方法が和解がよいのか判決がよいのかだと思っている。離婚の調停を見ていると、統計でも明らかであるが、3回以内で終わるのが相当数ある。この方たちは、自分たちで決められる方たち。何ができないかという、問題点が多すぎて論点の整理ができない。それぞれ自分がどこにこだわっているのかについて整理ができていない方たちに対して、我々が整理をすると、問題点がわかって自分たちで決めらる方たちだと、3回、3カ月～5か月で終わる。しかし、そこで終わらない人は非常に長期化する。3回で終わらないと、10回や20回、訴訟まで発展してしまう。この方たちに対しては、こちらが決めてあげるか、突き放すかのどちらかしかない。

根岸： 先生の話聞いていて、アプローチの仕方が精神科とまったく同じだと思った。治してくださいと言われると、「治せません。あなたはどうなりたいですか。治りたいです。ではお手伝いします。」というパターンが殆ど。一方で、本当に投薬治療を中心にしないといけない患者さんたちには、治してあげるといように、精神科の先生たちはおっしゃっている。その場合は、一生付き合う覚悟で精神科の先生と付き合うことになる。

蓮行： 私の劇団に現役の看護師がおり、アルコール依存やうつ病といったものと糖尿病を一緒に持っている人が非常に多いということを言っている。その人たちにどう演劇をしたところで、といったところはあるが、見捨てるわけにはいかないので、依頼があればちゃんと行こうと思っている。結局のところ、そういう大人にさせないために、入口のところに注力している。任期が切れるまでは、一人でも多く演劇の人間でアカデミックの仕事ができる人を呼んでくるという形で、なるべく近い将来先生方からも何かこれをやりましようというお話があれば、ご紹介できるようにしたい。

緒方： 演劇の持つ力をこの場で初めて聞いた。20年前から30年前ぐらいに、新入社員教育や中堅社員教育とかで、参加者が最後に泣き、会社に戻ってくると企業戦士として働くような事項啓発セミナーが流行った時があった。経験した方の話を聞くと、ものすごく感動して高揚して帰ってくるが、その後、批判的な話が出てくると、一歩間違えばオウム真理教と変わらないな、ということであった。

蓮行： 演劇は手法が非常に似通っている。どういう風に理屈付けをすることがポイントだと思っている。自己啓発セミナーはある一定の時間内に、普段仲良くなれない人と仲良くなったり、できないことができたり、ある感動を内発的に得ることが、大きなポイントだと思う。自己啓発セミナーはこれを種明かしせず、怪しい宗教ではそれを神の力だとする。演劇は、種明しをする。我々は、有限の時間という資源を、なるべく有効に使うために、決まった枠の時間でしっかりやらないといけないと教える。大学で必ず言っているが、ゴールを決めて自立的にプログラムを組み、人と共同して逆算して物事を決めていくことは、日本では初等教育から殆ど教えられていない。テスト勉強が計画的にできる人は、個人の能力があるだけで、しかも塾など外が組んだものを行っている。一部の外から教わらなくてもできる人が、自立的にできているだけ。

キャリア教育の専門家と組んでこれから進めようとしているのだが、小学校で環境の劇を一緒に作りましょうというワークショップを行っている。パナソニックが元々支援してくれて始めたこと。パナソニックは社会貢献グループからお金を出し、我々を雇って全国に派遣している。

本当は、パナソニックの社員に入ってもらいたいと思っている。子供たちと研究者、そして我々といったように、雑な座組みをし、「子供たちとは劇なんか作れません」と言う人には、ちゃんと種明かしをしてできるということを説明し、劇では専門知識を活かすように指導すると、劇を通じて子供たちは社会人のエッセンスを暗黙のうちに理解し、さらに普段学んでいる勉強がどこにつながるのかを実感する。このことによって勉強のモチベーションに繋げようと思っている。

手法はカルトや自己啓発と演劇は同じ。しかし、味付けと、時間をしっかり区切る、種明かしの仕方、その種明かしを誰にどこまでするかということが、ポイントだと思う。

緒方： 人生というのは一つのドラマだと思う。演劇というのも、恋愛などを凝縮しているドラマ。特に大学4年間は、引いた目で見ると、勉強だけでなく、サークル活動や恋愛といったことが凝縮している、一人ひとりや仲間の舞台であると思う。

蓮行： 好きだということも、演劇ワークショップを使うと、安全に体験できる。工学部

の院まで 9 年間、食堂のおばちゃんとか女の人と話さなかった人でも、可能である。

例えば、老人ホームに行き、3 人の高校生が 1 人のおばあちゃんを争うワークショップを行った。この座組みでは、老人ホームへの慰問ということで行くという風に、女の子に慣れていない人には種明かしをせずに伝え、一方で老人ホームのおばあちゃんには、誰が一番女の子が苦手かなどという種明かしをしておく。このように安全な設計をすることは、手間暇さえかければ、理屈上は可能。

緒方： バイパス効果とは、そのような概念があるのか。

蓮行： 自分が言っているだけだが、心理学にそういう言葉があるらしい。

根岸： 似ているのは、カクテル効果といったものがある。例えば、あなたは素敵と言われるよりも、第 3 者から素敵だと言われているよと言われる方が、よりいけていると思うといったように、当事者同士でやり取りするよりも、他人から聞く方がよいというものに近いのではないか。

蓮行： 学校の先生は、～しなさいといった、次やる短いピントの言葉、「短期ピント」の言葉を使うのに慣れすぎてしまっており、「長期ピント」の言葉が大事だと言ってもなかなか受け入れてもらえないが、その方たちを説得するために、「急がば回れ」と言うでしょう。これがバイパス効果です」と説明する。

根岸： 直接言うのではなく、間接的に言うということか。

蓮行： はい。そうであったり、間接的なプロセスをデザインすること。

根岸： カウンセリングの手法も、「あなたはなぜそれをしたんですか」というと直接的になってしまうため、「あなたは一体どういうことでそういうことをしたのですか」とか「何があなたをそうしたのですか」という風に聞くと話しやすくなるといった感じのことか。

蓮行： その通りである。

3. 今後の計画等

野村： 2 点提案がある。一つ目は、蓮行先生の泡沫裁判のスキルを学び、我々が交渉教育に行かせないかということ。交渉教育は法学部生が多いのだが、もっと一般の社会人を対象に教えることによって、教員自体を訓練しようと思っている。交渉コンペティションは強制ではないが、大学のカリキュラムとしてやっていたり就職のためというのがあるので、そこに別の目的で社会人を相手にしたときどのように教えられるのかと思っている。

また、日弁連法務研究財団から支援を頂いて、法教育というものをやっている。

方教育とは、一般市民に、社会のインフラとなっているような司法制度とか法律的な考え方・価値観を感じ取ってもらうというもの。これを法学者がやってしまうと、簡単な法学入門をやるというので良いというのが現状である。交渉であれば、交渉を通じて法律問題や法律が関係ないものなどがわかるのではないかと議論していたが、樋口裁判官から、交渉というもの自体もわからない人もいるという指摘をいただいたため、交渉じゃなくてももっと普通の日常生活から導入していけないかと考えている。もっと敷居を低くするために、ゲームとか、Webでいろいろ話し合っている間に交渉とか議論が身についていくということができないかと思っている。

演劇の手法を使った泡沫裁判というものでは、小学生でも社会人でも楽しんで学べる。泡沫裁判について我々ももう少し見学させていただき、教育に使えないかと思っている。

2つ目は、立法劇みたいなものを開発をしていただき、また東京の研究会に来ていただき、締め切りを設けるといふ風にして、コアになるようなアイデアを話して頂くという風に、1年ぐらいをかけて形にしていくのはどうか、と考えている。

自立した一般市民をつくるための教育用教材を開発できないかと思っているか、いかがか。論文を書いたり、一緒に本を出したりなど。

蓮行：やる気は非常にある。声をかけられた順に対応している。

野村：NPOの方で大澤先生にファシリテーションワークショップをやって頂いたときに気づいたことだが、木川田先生も大澤先生もファシリテーションという手法を用いているが、その目的・背景は異なる。したがって、比較するのが面白いのではないか。根岸先生もファシリテーションの名手であるため、御三方のファシリテーションを実際に、大阪大学でもよいがもう少し広くNPOなどで単独でワークショップを開いていただき、観察をしたうえでセミナーを開き3人の共通点や異なる点を取り出す作業をすれば、他がやっていない実践と研究ができるのではないか。

木川田：ファシリテーションはすごく効果がある。懐徳堂に投資をした老舗の企業が、大幅な事業改革をしたいということで、30代の人を10人集め、どういう方向に企業が向かって行ったら良いかについて3ヶ月間ファシリテーションを依頼された。自分がガイドしすぎることは良くないため、なるべく引き出し開けさせるようにしたが、安定した企業であるため、最初はあまり変わろうとしなかった。しかし3ヶ月後、ものすごく変わる。今まで自分の事業や会社しか見なかったが、会社の

社会的価値、文化的価値までに目を向けるようにまでなった。
今感じていることは、ファシリテーションにはある技法みたいなものがあり、いかに若手に伝承していくかというのが我々の役目ではないかと思っている。

野村： ぜひ、新書などを書いていただきたい。

木川田： 学生に自分たちが学んだことを基に作ってもらうことを考えている。2つのゼミでは、ノンバーバルコミュニケーション、ビジュアルコミュニケーションを使った感性を引き出す教育をやった。自分のイメージや他社のイメージをビジュアルに表現するもの（冊子）を、評価後に学生が自主的に作った。コラージュという手法を教えた上で、等身大のパネルにコラージュを用いて、自分がどういう人間になりたいかということ、**Mission Vision Passion (MVP)** というキーワードを基にデザインさせる。それによって気づきが生まれ、行動が変わっていく。

以上